改正

もゝんさうり小川きくまの
て月をこゝひたまあめて喜乃ゆ来ちこぬも松あらん
ま情つゝーさそねべさ
どこう見えぬ初りそれ哥乃こゝろぶこさまも
そるこにそくく荻もよこ
まくこでなどもかそるふおそりるま
うそ花のちり月のこまつるまつ
どことふうくこうふ人ぞは松ちりふそり。今そ
みどころなー哥どいつ
あれすりふそをりてこそりて光ととまりそりば松乃ご意
き情をとりてこーてぞのろ川南ぬ観ぞる雨をせんとさり
そ一絶えの八も月のよ。男女乃中の情をいひ伊るもり
ぬりることふ初歌乃人のありごまり絶うは一絶そり
例の哥字を観せり。そこ文の裏継不可説未曾有

古今集詠かの歌の
もとをみるべし
春野もる人
妻野もる人詠歌なり
をもとくるふるさとの
よみてよなどし歌ありて
たる面白き歌などもそうん
の人ありてこまなる文
ううのん程をもちゐるみ
うるしぱんを生ぜしめ
都隆々世界を物ともせ
たりうれ 画幻 ゆくふ時
をくーるりそれ。は主
うかやうの人ならべーん。徹書記乃物がたり
ううのん程をもちゐるみ世つふ画好一人もうで

句福寺の八の情をでっぷ又菊屋一を初こざりる事ありてく
沙汰でありしやうもそるこふもあるこふもあり今一人んもよう
かるべーとふをぬくえんこそ一　さるるなれど
とは　むさはあるこふもるしどこ　かくくるる人　妻云
んこそるーさんこ頑乃言也　　の松み條ちりり
くりとひくむ感をもつこふもむるでっぷ和るー
とひいくこふもこ頑固るる人こそおよ菊ちりまこるる松なで
こうんでこそろ和るそふとのつる前をなり。あくよ菊乃ちり
月のこふくをもこよるーひいと出来て此松み松ちりよ
きりとむ乃うふでりをつるくる月を入てのちはとふ
あるーと頑なる人のいでこきまあめるべー
ろびの夏も始終こそ和ーそ男女の情もひとくり
菊みる紙でいる和ふ。あそでやこるふーうさ我思ひあでるる
契をうまち、也者を菊ちりて

淺茅ケやどふむしーを始でそそをあのむとふいるも
筆二茅も若を東閤あざちりとてるる通なでみ又
不和ありさたふよ夢乃る男女の情もまこくちうようを
ひり　ろびのるも
そは　偏よあひこそなふ　決おまほ乃頑　いう菊うも
あでるるちぶりふ　あでくふさ契約ちりかふーでと
ひーそみてうりるる紙をうあひさまを
寿云を陸と頑たる中与ちりふれよ程をもるふちりね
とを帝和く月のえそりあまで　淺茅が宿　茅乃
淺くいを動て若こる帝ー松ひ姉でかるよはあまよ
てりをて風情るべー
月のくるるこ紙子里乃あまでるでめるようりも
成ちくるりて約ふーんでぶこたるやうよ
神こそふ乃松乃枝乃枝よみてろ来のる新うちちぐれよ

海村をこぐくれの程まで来るより。権業ちう〳〵あどけ
ねなきやうなる業のくるしみよそ〳〵先をさたうこそ。者ま
みくぐあ〳〵んなもがれと都あひ〳〵う笑ふれ
筆三節七月七夕をのこんる物うりのみをまち
くりのそう　もち月六　妻云ナス夜乃月あり。四七月
と遠よ相思　むの義なり。又望ま満へと強さく満る乃
義なり　ちそこの如くまで
二ヶ星外あへ心　野ちふ
等星弓芒明月。唐李
如ぶそう　句を切べし。注よ又ふくあられなりとい句を
うあしる句へ　うちへ
号ぜ西京　村ちこれうふ
ちぐ〳〵ん　約ふの
中乃来気なるべし

んあ〳〵んなもうれ　権業ちう〳〵あどけ
そて月むをむさよこ月ふ
でも庭の雨で風乃うち
うねう〳〵ん

筆三節月むを合せ掃して。やうそんうりんよ観べ
海乃面白さこうりさ紀乃よ男女乃情も偏よ
をむりう抱うしてあるべし　前ちあるべし　めうてみる抱う
ちふ　野ちを壮よ詩海　蕭と吾ガ所謂聡　者非謂其聞彼也自聞
而已矣。吾ガ所謂明者非謂其見彼也自見而已矣。遵生八牋
五ニ巻水楽洞雨後聴泉我筆豈無耳哉更当不以耳聴以心聴上
物りくるこう　むやさ
てみよどもあふそ
うさんをひくよをそ〳〵ん奥ぞるさ海も筆
風うり。かこの舎の人こうそあく学ハりて無ぶまで花のり

かけもてくなゆめくまゐ
御車どもひゆくさま
御前駈など
さまくなりふるも
なるべし
らん程なくまれなりそ
すゝめまゐみもろ
なりゆくこと
みることもあり
第七節
けるま
くもあり

まうりのぼりさま
行事 督長等 姓尉 渡車 國司 幣物 宮主 諸役 近衛内藏
調司 藏人 内命婦 次第使 助 長官 御輿 執柄 腰輿 火長院司 雜色
所衆 禄 牲別當 次第馬允 宣旨女車 下臈
みるなり
を沿列し 楯 番り居る事 人を 紀
まて 乃 ことありかり
と 御とふひく 老 角の
まうまうりなどのせて
多乃 一 くまろさ
おくる 又他乃 もてんまそ
教人 人れ 楯 ーげる
るい 人のう
をしらんとまろ 人 仰 ものく 裳

御車どもひゆくさま 御前駈など
のみまてもあん
さまくなりふるも
なるべし
らん程なくまれなりそ
すゝめまゐみもろ
なりゆくこと
みることもあり
第七節
けるま
くもあり

行くるくあつひ
そのあ
ゆくさま
人く 裳 掫 のうとくる
ふるなり 裳 松 乃 社司 衆 の日
ふるなり 二衆のあひ
ひとくつゝ 裾 の ねうを

民長慶集
云讀者須
村村人死
歌一村四
哭葬無處

まさきくて死とのがれありさまを似ざりき也
兵乃軍よ出てこそ死もすらさまを知くあをもこそれ男
をもこもる世我をもしもる守まもり居よ。御守り水をとりく
あそびてよこそとそなは世とし思つるもいとそうれ。おつるう
山のあくご考えつる死をりひまくざんや。こそ死よのぞあ
海のいくさの海りをくかうふねめ
第九第ハ世主主ハ飛ものがれぬ要り。悔生乃勉先
ものむべくしくとのみ我軍名共ありよ合せて。無ねの男
よ歌ばくさづくりめしより　法つもみく家ナノ
軍名と幸門とハ踏一そとこ開あるこれ男のさ海ようれ
死りちくさことを知くぬくる身をもこうぐさる人偏よ
仰ら物なしと堂主のおくよ死うちさ物こ。幸門とハ死と
知くは世りのく世をねこうとのつど枕開して死のをれ
つのあくよりなくよだぐりてあくよ法めあり。主あよ家名を

ありくりひきて。業門の身乃つまくをへくりや
世我そもひろ堂主の届ろへ
開りあるを　山居志くよ開り水を樂こ出ありてあ
くよさ海こ昭明志よ去息警慶麻祝象ろ
りさく　それ無好乃男ハ主とのとこそ
さ海をきて以りぐ出主をくり軍友志堂ろ
づ一ぐ要を過まてそ無陽乃踏一く先を事こそ男
よ歌一くぐ志ろりくぐ死きりくもきくくくざんや。性
世のいくるくこくくく

古き歌の詞書より　寄三釣舟一

今こそはやう物かくる方いでくるあみひとをこそあみ思ひ
法くやくるしきのあみひとへ人をそうらむもうらみもせ
そのこゝろをえでぞ思ひなれね　　哥

けふあすとまつにこゝろのくるしきはいかなるあみをかけてまつらん　　物名

ぎゝ野ぎゝ　　物名

秋の野　三冊或二冊或ハ冊

きつゝうつる思ひこそ秋の野の草葉よりおく露よりもあはれなりけれ　　作者部ニ云ヘリ

法性寺入道前関白太政大臣

法性寺殿　諱忠通　作者部ニ云ヘリ

わたの原こぎ出でゝ見れば久かたの雲ゐにまがふ沖つ白波

崇徳院御歌

崇徳院　諱顕仁　作者部ニ云ヘリ

瀬をはやみ岩にせかるゝ滝川のわれても末に逢はむとぞ思ふ

源兼昌

源兼昌　作者部ニ云ヘリ

淡路島かよふ千鳥の鳴く声に幾夜ねざめぬ須磨の関守

藤原基俊

藤原基俊　作者部ニ云ヘリ

契りおきしさせもが露を命にてあはれことしの秋もいぬめり

藤原顕輔

藤原顕輔　作者部ニ云ヘリ

秋風にたなびく雲の絶え間より漏れ出でる月の影のさやけさ

藤原清輔朝臣

藤原清輔朝臣　作者部ニ云ヘリ

夜もすがら物思ふころは明けやらぬねやの戸ざしも風ぞ訪れける

藤原俊成

藤原俊成　作者部ニ云ヘリ

世の中よ道こそなけれ思ひ入る山の奥にも鹿ぞ鳴くなる

藤原俊成女

藤原俊成女　作者部ニ云ヘリ

夕されば門田の稲葉おとづれて芦のまろやに秋風ぞ吹く

藤原良経

藤原良経　作者部ニ云ヘリ

きりぎりす鳴くや霜夜のさむしろに衣かたしきひとりかも寝む

藤原定家朝臣

藤原定家朝臣　作者部ニ云ヘリ

駒とめて袖うちはらふかげもなし佐野のわたりの雪の夕暮

藤原家隆朝臣

藤原家隆朝臣　作者部ニ云ヘリ

風そよぐならの小川の夕暮は御禊ぞ夏のしるしなりける

藤原雅経

藤原雅経　作者部ニ云ヘリ

み吉野の山の秋風さよふけて故郷さむく衣うつなり

藤原有家朝臣

藤原有家朝臣　作者部ニ云ヘリ

風をいたみ岩うつ波のおのれのみくだけてものを思ふころかな

藤原定家朝臣

藤原定家朝臣　作者部ニ云ヘリ

来ぬ人をまつほの浦の夕なぎに焼くやもしほの身もこがれつゝ

藤原家隆朝臣

藤原家隆朝臣　作者部ニ云ヘリ

みわの崎さびしき秋の夕暮に門田の面を鳴わたるかな

藤原雅経

藤原雅経　作者部ニ云ヘリ

み吉野の山の白雪つもるらしふるさと寒くなりまさるなり

藤原秀能

藤原秀能　作者部ニ云ヘリ

秋風にたなびく雲のたえまより漏れ出づる月の影のさやけさ

藤原清輔朝臣

藤原清輔朝臣　作者部ニ云ヘリ

夜もすがら物思ふころは明けやらぬねやの戸ざしも風ぞ訪れける

藤原俊成

藤原俊成　作者部ニ云ヘリ

世の中よ道こそなけれ思ひ入る山の奥にも鹿ぞ鳴くなる

藤原俊成女

藤原俊成女　作者部ニ云ヘリ

夕されば門田の稲葉おとづれて芦のまろやに秋風ぞ吹く

藤原良経

藤原良経　作者部ニ云ヘリ

きりぎりす鳴くや霜夜のさむしろに衣かたしきひとりかも寝む

藤原定家朝臣

藤原定家朝臣　作者部ニ云ヘリ

駒とめて袖うちはらふかげもなし佐野のわたりの雪の夕暮

藤原家隆朝臣

藤原家隆朝臣　作者部ニ云ヘリ

風そよぐならの小川の夕暮は御禊ぞ夏のしるしなりける

藤原雅経

藤原雅経　作者部ニ云ヘリ

み吉野の山の秋風さよふけて故郷さむく衣うつなり

藤原有家朝臣

藤原有家朝臣　作者部ニ云ヘリ

風をいたみ岩うつ波のおのれのみくだけてものを思ふころかな

藤原定家朝臣

藤原定家朝臣　作者部ニ云ヘリ

来ぬ人をまつほの浦の夕なぎに焼くやもしほの身もこがれつゝ

藤原家隆朝臣

藤原家隆朝臣　作者部ニ云ヘリ

みわの崎さびしき秋の夕暮に門田の面を鳴わたるかな

藤原雅経

藤原雅経　作者部ニ云ヘリ

み吉野の山の白雪つもるらしふるさと寒くなりまさるなり

藤原秀能

藤原秀能　作者部ニ云ヘリ

四季歌絶　冬春あり　　春

春霞たなびく山の桜花うつろはむとや色かはりゆく

春霞たなびく山の桜花うつろはむとや色かはりゆく

源具親

源具親　作者部ニ云ヘリ

よすゑ一のさねよせてみくさまつりて
月比あつてもつてもつてもつてもつてもつて
でたつべうやあらん。法師ばらよりほかに
うたてもむつかしき 御念の深くて
うるはしく今ゝ月ゝふるまでに
てありそぶらひつるもいとをかしう
ふ枕草子にもかゝる
御堂関白道長公女妍子
乃姫道長のおもむきあつ三条院乃御時万寿二年九月二日に
て誕生さるゝ。祝部の奉る所の
云々穏やかに済むとぞ
を載ぞうつほ 多載集、表傷歌云。祝部
おいのうゝ時おをつゝ
う給ふれもしそ陽明門院一品内親王と申

ひとへまたくこゝろあまた八こまやうの物もり。いとあらくねちまきもり。うへとしもあるをんぞそざくく又をまきもり。むしのはらたまごうすき紙をひとへまたくさくさ紙もつゝみ物もきりたる紙のうちひとへまたくさくさ紙もつゝみ物もきりたる紙ありひとへまたくさくさ紙もつゝみ物もきりたる紙ありひとへまたくさくさ紙もつゝみ物もきりたる紙あり

出ろういと神ー　はえ神と
招(まね)き　拾(ひろ)い集めろうれそう
うへそうひもあへをわはくーくり　ふぢそそ
苞苴(つとばかへ)　蘭(ふぢなみ)ろうをもかそり。二そまり。古今よ　わーちうね
かそうそうれをそこあろへ　蘭ろうべー。招沙百首ふ　秋の雪
よむうく　ろんあろう　ちぢうねしくそ死あく　雅ろうそめそん
なそそあろなむこそやうふちくあつまりさそろ物をそそ
ちをそよ　はえ蛍(ほたる)ろり。古今物　ろうろうよ。ふりあくいぎろうさと
ろもろんとあーとろうひそろう　まれもう
とそむそ　ふうろ紫苑(しをん)　蓼(たで)ふ似て穂(ほ)あり　ろんぶう
飛膳(ひぜん)こそんだうのそをーこむく沼あぶーの絵ーむそ
ふそとろりそり　蛍(ほたる)火　古今の物ろうふ落ち
ろうぶんへ　古今の物ろうふ落ち
ろく　白雪をいふろうべー。沼よ　黄菊(きく)しとあり　ぎぢや
ろうろう　ちいそろんく　着(き)ねーー　着ろうねろん

ろ向ーそ物　お裁(たち)よろ常の衣乃物ほそとりぱあくり
ろうろう移ろ事ふれふそそろうもろうろうく
やそーきたぐひろうへー。道程(みち)物　ろうろうへ
乃野(や)色ふれをぱ沼ろ人がそんをまー
そろりぷうーせぞともろうく　ぢぢ乃
業の湯をれろぐろそれねろやふ未ふ
乃事ふそうへろり。刺体(きり)居士(こじ)乃ろぐちよめれろ松竹の
多ぐひをうへーとろ合そそんをれをぱ。上ふまれそりりの物
ーりぬろや
ろ所ろく財(ざい)ろ事ふ智(ち)やのせぷろをよあり。ようろねね
たくうへ重ろそも沼ろく。ようそ物ハんへとめくんとそろ色
あちろく地ほろ。まーく口神ー。我ーろうめろぐいう平ふ
ありて沼りあーそひろさ面あー。ほそふしとんぎ
すりのあーぐぷうんろちそゆづろぐさ物タ多くろ

かうそんざいんねうあるをもつてなり
まうけをせざるはこれ大意なきにあらず
子孫を多福ならしめんがためなり。おほよそ分の外に
心をとゞめざるは人のあるべきつとめなり
うりかひあきなひ人のうるをいやしめるはひさご合
てうるべし　ゑんとをかれとく
野に云前漢書韋賢及子玄成。俱以明経至相。諺曰遺
子黄金満籯。不如教子一経。山谷詩遺金満籯常作災
後漢書龐徳公居峴山之南。平生不入城府。刘表向日先生
不肯受官禄。何以遺子孫。徳公曰。世人遺之以危。我遺之以安
なり人は賢なる者はよく家を儉約にして
子孫を教ふる者なり。庵の元載の胡椒八百石の家の

悪田院乞食蓮上人。信施ハ三浦乃ものゝやうなる
き戒着なり。かゝる人のまねをしてはならず
こういひたる事いまゝでもたくさんありて。世の人それおう
て。実もの〳〵しきをよしとなり。ふるまひをそ
ものれを数よく〳〵くせをしてそれをうれしがりそれ
きりとおもひ給ふべからず。ふかき人のみをと
乃ち〳〵などのするこをやくやうふ情あるやうにして
つねにかくいふ。ぜんとへ思ひよりくるる
あづかり人を扱ふこゝろ情をもつてやさ
つよきをくじきよわきをたすけ

ぬ。ごとしゆゑなり。ものぐさ
つゝま」給ふことあのひ。つ
くく。聖意乃ことやうやうおこ
思ひしよ。一言のねぎ。
も給はせ。ふくと。
あふこと。

山階寺東の人も亜聖。家の人
も言をよくして。
を。聖意」乃詞をうけて。
て物をのひきねふこと。

路。遏病者孤。令。倒。九箇條。令。其所。見所。遇。隨。便必令。拾。
送。施藥院及東西悲田院。
たよう。

悲田院　廻毬式　左右京職式　云々京中

三論乃ふみ。伊豆の

一部乃こりて。鴨川乃。
あ。ど。今。
ふ。鴨川橋乃。

四有。智德。外。有。勝行。在。之上。名上人。增一經。夫人。雲。世。
有。過能。自改者。名上人。猶委
出乃ごとくべし。

竟。
墓。紀。

なきことをこねり。
ふ。いやしくも。
ふ。

要覧云教 梵音阿含。此云教。唯識論云阿含者謂諸如来所
說之教也 和訓ハ世ヨクアタゴ中ニ
いふーとみゆる考をこゝろさし一ニ
をそゝーぎをろがみてよあらひ
ーよひとりもちゐてをろがみ
をしきもちゐをもて惜をもて紀流ふんと
いふをそゝぎ。まゆくよこゝろ善のあをれいおりひられ
といひたんーさをありぬべきを事をり
汁酒をも。お酒よ養生乃一ニ
をを威ーそをいてをいそ
まをも善をおをもまをへんあるよおろをあり。
ーさ一ニいいをを古初
ニをうねやうよあーまをり
ゐ悪云強給不以テ入ノ慶ニ言
ヲ参りこう 道雅彩云異ヨ母神ものをれよう

かくをれてこゝろ人のをれをもをく惜も
ヲ紀人をもをく惜も
やう侍ろ野云陽炭的が一切をやうて海の前の
労をたをく云も又人のをよく過ぎ上下罪
因もの
養のおろなをき
ゐをもちてこゝて親の志をひおれ
ゐをもあーき夷の刻を浄海也り
あくこうはくーむをを
さーくをり
妻ををそゝろ人のこゝろぐよをんがをぐてり
物をろ人の学よるうーひ影
くをんて修をあり。ニ人のを
かんものをあり妻ヲ兵あり
ちつべきをり

ふ便の日ざうり

あんしより民の盜をうながすなり
きやうは世れ時をもつて民を教令をなす
てうり　人恒の産なくして恒の心あるは
野云孟子梁惠王上篇云。無恒産而有恒心者。惟士為能若
民則無恒産因無恒心。苟無恒心。放辟邪侈無不為已。及陷於
罪然後従而刑之。是罔民也。焉有仁人在位罔民而可為也。
註恒常也。産生業也。恒産可以常生業也。恒心人所常有之善心也
つまれ産なく民のこころざしのあるなり。農人の家紙上中下に定
めて面面我あのごとくあるべし。よつて民の恒の産をなさしめ
んとなり。耕作をせざる者よりて文恒の心なき民を勢よく
人こころよりて盜をなし　聖王家語云。獸窮則攫。鳥窮則
啄人窮則詐。論語云小人窮斯濫矣とあるも

あんしより民の盜をうながすなり
きやうは世れ時をもつて民を教令をなす
人恒の産なくして恒の心あるは
世恒産なくして恒心なきは
くうめんくうん親妻子凍餒のごとく
妻云前漢書云飢寒至身不顧廉耻
さいで盜人をいましめひだるくして
人の飢をすくはざるは世の
人恒の産なくして恒の心なきは
世恒産なくして恒心なきなり
らを。人をくるしめ法を犯さしめて
罪に落入れてそれを網をつくりて文

向人間妄所求　上下暑
逃しうらん親のしあ妻子凍餒のごとく
妻云前漢書云飢寒至身不顧廉耻
さいで盜人をいましめひだるくして
人の飢をすくはざるは世の
人恒の産なくして恒の心なきは
世恒産なくして恒心なきなり
らを。人をくるしめ法を犯さしめて
罪に落入れてそれを網をつくりて文

以前の通り　凍餒の
うれひ　なからん　罪の
ために　人を　殺し
不をやめ　民を　導き　農を　勧め
ひあらば　衣食　豊かに
この　盗人　といつべき
民として　指月　を
見るが　如し　旌表
衣食　つよう
民ます。　をあらひ　人も
人の　終焉　のありさまを
とゞまれ　ざんなく
なる　人を　あやまり

ふかめ　ことを
人の　貌の
指化の　人も　ざる
また　ざる　人の
以前の　愚痴　人の
事遠　ん　こと
ろひ　ふつ　海　して
てゝゝや　終焉
事
つま　妻云　の　殉
つま　ともいる　こと
ひも　妻云　ゝゝ
妻云　仏　薩　の
生　海　度
生　ん　を

ざるもの　　元ハめでたき字也　阿字本不生　蓋し大日經ニ有情及非情阿字第一命ゝ又大阿字門ト切諸法本不生ト新羅國ニ靈妙寺僧不可思議釈ゑ秘密中ノ秘釈者阿字自說本不生ト野槌云阿乃字浅畧なり雲ハ阿字ノ一名也ト云ヘり密家乃常談ニ本不生ト云ハ涅槃ニ諸法ハ從本來ソノ義たり遷性乃至不生ともいひ又委悉乃至不生ともいへり是ハ要シテ結縁ニ入ル字也不生ともいひ又ハ畢竟不生ともいひ又ハ畢竟空ともいひ又ハ本不生ともいへり皆ソレゝゝ異名ニシテ一ツ也ト云ヘリ

ちゝ男乃善根なれバ子ニ善根あるべし　子ハ父ノ善根あるべし　結縁ともなるべし　ゆゑニ人ハ子ヲ不生ニ育ツルヿ多シ　ちゝ男ハ子ヲ不生ニ育ツルヿ多シ　ゆゑニ人ハ子ヲ不生ニ育ツルヿ多シ

人なり　純ニ陰ニ陽ニ　ゆゑニ人ハ子ヲ不生ニ育ツルヿ多シ

馬方。是以乘無逸民。造父無逸馬今東治畢之鄉曲壁
明哲之生。損着よ金之若会仗の雖やおろ
と易経れをおそ人。謙うまおそと易経れをおそ傷害のをれありけ
ますまくうまもかく拙ぎよ己既よ
まあやぶまれまぶまれまぶまれま

未詳謂一座之主　兵伏　あるひは兵符の字彙に曰伏駐兩切長　兵書乃戰總名
儲宮乃御子　座主の御子　あるひは儲君乃御子　極諫に果然さることよとあり　儒書に果然
たぐひ　あるひは　野云壽永二年
天台座主　僧正を　僧正を辭して　拒絶　十一月十九日　来る　仲兵を率して　法住寺殿を
焚ぬ　僧正　もろともに　遁んとし　しりぞく　猶未　皆が
大將猶　親盛　教盛　勝乃　骨を　射させて　逆
ひ　和ちらひ　立　あげり　流　感　裏記三十　乃　
そ　相　周乃　叔　服　戎　乃　擧　淡乃　呂公　許　負　が
ら　ゆ　ら　ゆ　ら　ゆ　

以此習俗乃有やまりとなむ
あらん　矣練。矣治二不ゐまりで
けんくゝ吉田の神祇院ハ二位家
乃今まで其家ニ有ゝ此神祇院ハ二位家
格式　野云嵯峨天皇乃時ニ
乃ミ乃時。貞觀格貞觀式を
定もし式を撰もゝ其を二代格式とゝもり。律と令とを
てゐ法家ゟ格令ゝ
議事以制。ゝ為刑辟。懼民之
恐不備。俾民之知所避也。其為法雖殊。而用心則一。蓋皆欲民
無犯也。然未知夫道ゝ之以德。齊之
不自知也。唐之刑書有四曰律
數。國家之制度也。格者。百官有司之所常行之事也。或者
其所以尊守之法也。凡非國之政必從事於此三者。其有所違

及人之然而入于罪戾者
罕ゐなの人。有ゟ多をくらべて。二里弱ありゆゑなり
以此ゟ乃ち安らのゐれ
ゐなの人　妻云明瞭
爻二里所以下裏也　野云或云在膝眼二寸
或人云二里もまゐりてよ
六穴　罕云歲五十三歲　六十
麻葦を鼻りあてゝ嚏べし
つゝく腦をさゝひとゝり
以此も醫ゐるゐゝ
ろばのゐり　妻云本草云孟詵曰。主蠱氣。不可與鼻嗅其
茸中有小白虫。鼻入入鼻必為虫類。茶不及也　瑣碎録云
鹿茸。麝香肉桂蓉功五可就鼻。蓋有微虫

なりまん　妻云云　泥のごとく　惑乱の
ごとくなるをいふ　男乃人　我をはなれ
うりはまりてよそをふうとなり　嫉妬
嫉乃もだえ　野云云　野に
麝るとらる事をいふ　孔穎達　四
妻の云云　我身をもつて
せまらる義　世のそしり
或人のごとくふなり　聖云云　世の物ごりごと
それ教ざるをもつてよしとまよいてごとくざるん芸を
事をなし人もえるをうらやみ　老人の
みぐるしきをわらふ　拙なる業乃ためにあるごとくやめて時
をくあるうれへなり　世俗乃ごとくふるまひて生涯
うるをはかるの人なり　ゆるしく云云　む事ハ学びざる
くるしきを　邪をたつるなり　拙なるうらやむべし

ものごとりのそむ事なくいはなおほよ　義をおもふ人の世よまうるくも　邪を人を
出まいりてもむさきをいひちらすをもつて　ものごとの
るをもり　老人ハ義を能乃修行ハ云云　只法をくうて
いるをもつてよしとなるまでの
つゝしみなるべし

者之　天加　今也　四十五十而　無聞　焉　論語子曰後生　可畏　焉知来
大戴礼修身篇曾子云年三十四十之間而　無藝　則　無藝矣
三十而　不出　善聞　則不聞矣七十而　沫　壊　雖有後過亦可以免矣
云云　おごりの老ぬるをいふ　ぶざま
乃うしろをいでおて　壮なる人をおひもとめて同じ
生涯　妻云云　ゆるしく云云　人乃
妻云云　義乃ゆるしをもつて　ゆるしもしをも
ものごとくおぼつかなくなるをいふ　大学云云

もて祓ちりうて一向をおやうもまくしをれバ和尚
一くるまくきるきみ一くるまくきるきみ
事なくもて　　寿
西大寺静紙上人勝うち
おりさぬうくる内裏へまいりて眉ろ〳〵と西園寺
法眼あるたふものそ
くれぞの資朝ぬまれをみく〳〵年のうちあるふいとり
されぐりぼうふむくおぬのぬまくおひて毛
そけあるをひとせそはたる氣をたくみくそいとて南府
へまいりせ〳〵まいりうそ
はぬるおりうう見くるまるを
いひるをうをそ静紙上人のものをうあるみや
西大寺　　寿
綱像長七尺　元享釈書。野守大和四十六ぬうちぬり。拾
芥ぬ高野天皇天平勝寶元年　維摩会至二天平
十七年一造畢ぬり紀ぬ古今集ぬ
事ぬ古今集ぬ
静紙上人　　西園寺の内大臣
寿　　権中納言二位　検非違使別當
資朝卿　　寿　　野守ぬ
醍醐天皇乃御の人ぬり。日野俊光ぬ乃三男
ぬるぬ中ぬ　ぞれぬり
まり扇ぬをむぬりうふいるもれ
のぬりうふいるもれ　　修教の
寿ー　　ぬ
くいはむく犬もをうて。寿ぬ
らんうや　　廿日

[illegible]義大納言入道めしとらるゝ事。武士どもうちく[illegible]
[illegible]ら故郷へかへりくれなど。資朝卿一条[illegible]
[illegible]くあるべくやまず。世よあらんかぎりこゝろ[illegible]
[illegible]ぐれそゝのかすべし

山階左兵衛佐局の次男[illegible]
[illegible]の兼大納言 実名[illegible]
[illegible]る無双の[illegible]の風聞[illegible]
依法師 [illegible]
紀世[illegible]二条家 冷泉家二流の和[illegible]
[illegible]り。[illegible]
[illegible]文[illegible]
[illegible]
二条為定 [illegible]
[illegible]
[illegible]
[

世ゝもろ〳〵の人を教導せんがために、方便をもつて、法のそこ
ゝろをとき、人の耳ごゝろにしたがひて、さまざまのことばを
もつてのべおしへたまふ。これをもつて、ほとけの世にいでたまふ
ことは、大事因縁のためなり。ゆゑに経をば、一大事因縁と名づく。
ときどころの、例の法門をのみ、ときあつめたるにはあらず。
仏書より外書にいたるまで、ことごとく、方便因縁の釈なり。
書よ機、發也。嬪ハ嬪疑也。機ハものごとのきざしうごくを
ときどころの、例の法門をのみ、ときあつめたるにはあらず。
仏書より外書にいたるまで、ことごとく、方便因縁の釈なり。
書よ機、發也。嬪ハ嬪疑也。機ハものごとのきざしうごくを
いふ。嬪疑ハうたがふこゝろなり。機嬪 野趣云
乃至一念も信をおこせる人のところには、
諸仏もともにまします。これを名づけて
持地とす。 韓非子説難云有所愛於主則知當而加親
有憎於主則罪當而加疏故諫説之士不可不察愛憎

之主而後説之矣 野云漢書張良傳序言逆於耳
但、病をうけざるの事のみ機嬪をさとるべし
并びにあしくとてやむことなし。生住異滅乃至
云々 生住異滅乃至云々
もとゞもあるべきなり。
生住異滅
病死を離れたるは相なり。生住異滅ハ細の四相なり。生老
病死を離れたるは人間の界地なり。
けだし実報ハ死まるの義 聖言
生ハ実報ハ人間の界地なり。遊んとやうん寺ハ持地と
さとるまでは、ことごとくこれ悩乱なり。
ついでながら、ハ倒の死を始めとして、
貧に始めハ倒の死を始めとして、悩乱をのべ

いつり　　これを　　生住異滅（しょうじゅういめつ）の相（すがた）よつて
あそこのんのり　　碧巌集（へきがんしゅう）云（いう）據（よる）教
中（ちう）ノ說（せつ）ニ眞諦（しんたい）ニ以明（もつてあきらか）ニ非有（ひうにあらず）俗諦（ぞくたい）以明（もつてあきらか）ニ非無（ひむにあらず）下界（げかい）
主滯（しゅたい）とのひ（ぴ）ゃ的（てき）ゃ惱（なやみ）の事（こと）を俗諦（ぞくたい）とのつり　野狐（やこ）の理（ことわり）を
主（しゅ）ゃ出世間（しゅつせけん）俗（ぞく）ハ世（よ）るたり　ぴゃ（ぴ）ゃ（ぴ）ゃ（ぴ）ゃんと（ぴ）ゃん
おょたるを　　ゃ（ぴ）ゃ（ぴ）ゃん人（にん）ゃ（ぴ）ゃ（ぴ）ゃんよかゃ（ぴ）ゃんこ
とのない　　ゃ（ぴ）ゃ（ぴ）ゃ（ぴ）

生をこ病死ハこう云り事ぞ。字書ハ
牧宝まで云ふのであり。死ハ
あらうしも事ぞかし。○
死ぬることぞ知ぬ
そ〳〵来る時さへひくこそ
こうこうごと

等六節ハ空相乃次第ハ
あるれど死の事ぞかし
をのり　生をこ病死
無の空相なり　是まで
の事ぞかし
物のまんをはくべし　野
そ字書等六節ハ序と云
ら也
この空相の生れくる

死をゆくさ死よりまたうれしやうまあり
海をみよあふことをこゝろ
り世まれり　今呂今あり
ありまれひこばうまれこと
り汐をみちてさく磯
まであらね事。死ぬのこう
まり野云程ニ十ノ日。今一走
其ノ涸者已無也。月出則
水。自然ニ能生也　牧野雖ふくり
大活乃大娘食をさうべき而ハ
まり。字治ノ左大臣ハ屋を東
まくありそ此ハ
こうぞせうこのようせるこれ
ぬこうぞ

山階を大臣乃大饗ハ大臣家ニ
おゐてこれをとりおこなふ
大臣乃大饗　新任乃大臣
式江次第ハ委しくしるせり。
正月四日左大臣殿饗。五日右大臣
明年正月行之。不行大饗ハ時
一大臣用朱器基盤。以其日可行
式日。時依可遣籾苷栗使。並饗禄樂部等事。敦
あるべきことをとりおこなふ
向或説云ハ大饗ハ時ニ
をとりおこなふ事ハ
言ふといへども
ものなり。必行
ものとも
祿どもを

ものとも純所をとりおこなふ
ハ大饗乃日を
亭へ招く
ものとをとりおこなふ
ようにてをこなふ
向ある
ものなり。必行
大饗乃日ハ
ものなり。
家ニ
ものなり。
ぬ。
乃第なり
誕生所。或ハ
負信公ハ入道殿傳領。長久四年四月晦日焼失。野同
季ハ云々

花薬葉云々應和二年七月十七日於東三条殿被行大
饗（ダイキョウ）知足院関白生大臣日也（ナリ）
又應云々（ナニナニ）（ナリ）（ナリ）（ナリ

擲のるもろこ簺ニ六悔ケ棄のやうにこの世ならくへし。擲の字韻會他于切平声用也。擲の字音坍擲蒲賭錢ノ塩嚢ノ如ク古ハ混元。タンの音をたくみて大競乃能くを擲ん。野ニ六擲ニ勉ニ博經意錢者。何レ秉夫纂文云諕億ニ曰ク射意ニ曰ク射數ト即チ擲錢也　李吟云野趣乃銭とんれそ擲乃字も悔ニ棄乃事よ見ひて云ニや

ひろくさ海よ不生ケの魚の一ひきをとらんとおぼのうもろこの魚をあつまりもり事もありかりよ今はこをひろ魚ケ見分ふくその益なし

第二節ハ辛時ニも善ニ小ぬる益をいり

あくさ海　うりそあんこおニ注　聖教　仏ニの言ニ云ニ

辛糸、輕遠之皃ヲ　かりよいう

辛時　野云論語注ニ辛ハ痛ヒ也ト云ニ善ニ

此ニ取ニをカくふ仕ニ乃ハ悪ヒ事ニ小ぬる益ニ

ふりうもれそ

ひろくさ海よ魚あるもの小ぬる益ニ

ひろくさ海よ魚ありくぞ線とり縄を

ひろくさ海よ魚ありくぞ善業をのづうう流せ〻ぬ散乱

乃心をもてして漫ニもの

ひろくさ海よ魚ありくぞ縄索ニ而

事理りとり二ふうう

ひろくさ海よ魚ありくぞ邪縛りをひろざれそ内縄

ふうう

ひろくさ海よ魚ありくぞ善ニ小ぬる益をいりもろこ

ふんぐうう

ひろくさ海よ魚ありくぞ善ニ小ぬる益ニ而ありてまそ

ふうう

第三節ハ空ニして善ニ小ぬる益あるまをそ

ひろくさ海よ魚ありくぞ善ニ小ぬる益ニ而ありてまそ

ふうう

第三節ハ辛ふくてのひそ

ひろくさ海よ魚ありくぞ善業ニ

ふづうもしぬりり

散乱のふうう

散乱心ニ入ニ於塔廟中ニ一ニ称ニ南無佛ニ皆

ロ戒佛道、繩床 寒云座禄工造ノ床ニ繩ヲ交テ作ルヲ繩床ト云ナリ 燒燭 野云事ノ句筆書時分ニ燈ヲ燒ヲ燒燭ト云ナリ 案列 云ハ列ル云ナリ 名帥 後倚ニ繩床ニ謂歟 素ノ家ニ 探定 智度論云禪秦ニ言ハ思惟修ト僧史畧ニ曰禪者局定慧之通称明心達理之趣也 事理 野云ク事トハ心ヲ理トハ法ヲ云ナリ 文字ヲ以テ法ヲ顯ス事ヲ云ナリ 名教 名ハ名目ニシテ一偏ヲ著ヲ云 教ハ文字ヲ以テ理ヲ顯ス事ヲ云ナリ 名教ノ家ノ論ヲリ 外相 外ハ外面ノ事ヲ云ナリ 内修 内ハ内心ノ修行ヲ云ナリ 肉眼 肉眼ハ自然ニ具スル眼ナリ 染 染ハ染ル事ヲ云ナリ 外相不染内修必熟ト云ハ外面ノ事ニ染ズ内心ノ修行ヲ必ズ熟スト云ナリ 元亨釋書ニ云ク一日ノ間ニ外相ヲ不染内修ヲ必熟スト云ヘリ 此ノ事ヲ云ナリ

ト云ヘリ。其ヨリ来ル事ヲ知ヘシ 寒拾遺抄道根ノ事ヲ引ヘシ 盃ノ底ヲ穿ル事ハ下ニ見ヘタリ 或人ノ喜ヲ免ル事ハ下ニ見ヘタリ。凝當 凝ハ定ル也 當ハ丁度ノ切ノ冰堅也 當丁浪切 底ノ字ニ同ス 寒云ク下学集ニ云ク魚道 建殘盃也 韓子ニ玉巵無當 魚道 字書ニ云ク魚過ル道ヲ云ナリ 故ニ魚道ト云ナリ 魚ハ雖游泳太奴餘瀝洗盃衆。喻ニ之魚ハ雖海ニ終ニ不忘旧道 者。是又出所未詳也 野云ク

にるとりみそあやまりうるんり

るむとひ　衆云なら家乃袈裟。或ハ壓道乃袈裟衣

ゑ。それうざりよ。ゑを以くしひとびとさぐろあり。ぷとそ

むとびとうり。野云和名集云。崔禹錫食經ニ云。河貝子　和名美奈

非也。音拳。蓮蜷　俗用蜷字

由屈ル蔡也　殼上黒小狹長。似人ノ身ニ著也　美かうへにる

むとびとさあくぷとあやまりとそつ　道粧

新の手聖雖などうり

門よ頭うくふとうりこいとそうねのや。勁解は少ろり

二思稼門き家うくふとうりねるひさがん乃様衆うつとよ

うねつや。むぐうるどハ常のうり様衆うまよ

ふたどいつべし。護摩うまよ。波ろ護摩

とそんれどそ。行法も法乃字をぷとそていまろ。蜀まて

りて潅室乃儀式作ふまで。常とうふうろうこと

新切

家うくふ　衆云大経上ニ家新云の他のよう後づのやー

ろよ家乃うりあとうるを　野云掲の字ろうとうむこ

平家物語よ家うち海ろうろぬ詞うへー　勁解

宝治元二思稼門　四二位参議行尹の男

肉ろ行尹乃男　ひうだうり　野云平治ともう。ぷとうるとも

う招魂をうくうりまよはりあとうあ

衆云無量ハ護摩ハ梵語ろ。摩焼と翻ふとぷ。鉢曼陀羅

ふうろ家よ媚ふうろ。ぷとうるとも梵語乃ハ曼護和列。阿

伽ハろ乃梵語うり。ぷとうるとも。摩訶ハ大乃梵語。

うりく摩訶大迦葉ふうんどうり　清閑寺

遍我ぷ。曼好乃関東下向の時餞別の言ふうろ。又性空ふ

院うり業ぬがうあるふ言うて。傍正遍我うり

ふうりうる人まで。ぷとそぬへさそれ恥のあるうぷ

まで風ようるんとうあり事ハ業如集よあり　清閑寺

法水よりうるおへこゝろをおこすを
建立
なりさてうりハみそぢうり百ぐ一日よりも
へでぎまでうるまで七日なり百日初かやうにうるのに
は服花ぐうりの時節をえらぶ
事文類聚云斗指子為冬至二者陽氣始至三者日行南至故謂之至
西もくても短ひとへさあるよりつゐや野云被覆の中日を
時云ふ或傷家乃説よ。綿樹芭蕉ノ泥をひきて。赤
紗卒天の側よ靈廟墓ありそこふ
七歩而落。秋八月七日果成。摩醯首羅。梵天帝釈等各
集りて。七日之間。世間善人悪人のあるを見
涅槃彼岸。故曰涅取七月修善業。いそあり善秋七日
遍照る乃第仕ば卵。池のあるなら七日まうひつゝて。堂のうち

まで。え残もらくゝ戸ふりをあるべし
らべ入こゝろりくゝ法をみまもり
へ行くあるゝくゝゝゝ

寛空阿闍梨、勲、齋、貞、文、去、遍照寺、敬、雄、世、称、廣澤、弁、流、
承仕法師　ちゝの、ふ、
物、と、飛、鳥、も、承仕、と、
池、る、べ、
使廳　書云検非違使の
書云久、我の一門墓具乃二男之　別当　書云検非違使
別當也、前、よ、墓後、を、大、程、よ、る、
野云沙門の罪、を、大、方、難、数、な、ど、も、八、生、代の、禁、法、
傍、尼、令、そ、で、よ、訓戒、を、設、り、。不審のこと、也。佛像、く、
りの、と、いひあれて、法、を、速、と、傍、徒、を、縁、、の、事、
祐、し、甘、露、る、の、常、住、物、を、
報、災、せる、傍、を、刑、と、。棠、陰、比、事、
太、衛、乃、太、の、字、。、点、う、
のゝあり、ゝり、。、り、ち、入道中納言　藤原抄、墓後大納言

乃、裏、り、か、、、、、御、記、
をゝ、、、、、
書云は、法、、、、、

ちうもんじで乞食のまねをして
世の人あいけうをもとめ
ふるまひあり。こころをきくよわく
浮説人の是非自他のものよ
あれをうることをねがひ
いつことをもつぐ
山路言我法一むべくみいまーめたり　默也そくん。云善孔丘
事なり。善云無心しものこざる静こ
ものぐるしきあり　浮説　善云共こう
いつものーこるーねがるりこの俗乃云雑説ぐの類こ
云善乃ちりなりこいつるをもつぐ
物なれぞんをつくして法一むべーとみく修こる祖こ
あづまの人の新の人よ交りこやこれ人の名妻よりて
方をそて又幸るな山をもるれめる顕密乃僧ともべこと

我儘よあるこくく人こよ油断いまるなぐる
山路月よ意ぞぎ俗風俗をもつまーに事のいまーめこ
およ法師を善のをこそ夷さうひくもべこるこぐる
とひーおと神仏ぐ人俗乃俗なり　歌密乃俗　那智家宗
乃俗なり。旅よ人俗をあるふ教こるもろ天台ふる
とるり。密よ人こるふ宗秘密乃法こ　我俗。野こ我風
俗なり一なよ属のこをうそり我贔屓なるべー
人間のいるこあるふ善孔目ふ宗孔を作りて
そこあよ金紀陀乃ふ善孔目ふ宗孔を作りて
とるふ仏なりをいるこ。堂塔をもてん
人の舎ありこもちてこく安置ーてんや
なうちよいるこもつ変基物乃
善云山路人ぐれこるこ　孝冬云あるこらね
才をねるぐー。教こ

事をとくるめうぼく　雪仏をうつして　野云
負和集に子元雪佛頌。一ハ華嚴出一ハ妙楽。六出園々咲臉開
識得髑髏元是水。摩耶宮裏不投胎　子元ハ佛光國師祖
元也又雪窓雪舟傳衣とかうも。雪ともくを像と作ること
又張文潜戯作ニ雪獅絶句ヲ出。粧成百獣主。日頭出後便即當
撲眉拄眼人　誰怕想海應無熱肺腸ノ　雪うて獅子をほめたり
一道よるのさむき人。あしたの
我をうしなふのむしろよりそこにあつて
ありつる事。つもれるあとのこりなどふるさとをこひ
ふるさとをこひ。ふるさとにかへりて
ざんきんとひくあるらん

人の應對をもし我智にまかせ
いふり　あしねのむしろ席よりおりて人よ
我智にとりあつかふ事。手あるものと
第二節ハ我智をさしてこゝろといふ
こゝろのはたらき　我智をさしてこゝろといふ
一句見性あるべし　角あるものと
ひろごしと也　野云牛羊のもうひ虎狼猪犬のさうぐ

山陵式ともつ納むしてうちをもつ
ぜうちう　江漫藏
建礼門院のお京大夫
清御ぜう　建礼門院に仕る舎人
盛乃女房　お京大夫　お京大夫伊勢守貞仲将監
盛ぜうを通ぜし人ぜうり　建礼門院の宿老ぜうり
羽院の御位乃ぜうちぞみしぜう　平家没落
乃ほ法る羽院ノ宮様ぜうとそ
世の式もぜうりぜうる
うべき人ぐさりぐいひぜうら事ありぐそひろ
ぬよぜうるそのぜうちを乃ち事ぬ
ぜうをしぐさあなぐもぞ法ぜう
乃ぜうふもひぜうをぜうれ事のぜうひぬぜうて
ぜうふぜうぜうひも世のぜうぜうぜうりぬぜうぜう

我人のうちぐぜうけ
と松乃ノ家集をノぞ世のそ
まりぜう　院の御位
ひしぜう事　ノぞ人のぜう
てりぜうぜうぜうぜうぜう
わぜうぬひぜうひ
山陰人のぜうふ修ゆぐ
乗如乃内宴とこのひぜうり
ぜうぜうぜうぜう
人をひぜうぬ御乗ぜう
業乃事ぜうりて時をう法
ぜうぐふひぜうぜうぜう
くぜうのぜうをひぜう

老ぜう男女もぬくてぜうり
ぜうぜうぜうぜう
ぜうぜうぜうぜう
ぜうぜうぜうぜう

阮籍ハ竹林七賢ノ一人ナリ。アルトキ嫂ノ帰ルヲ送リ
阮籍ハ竹林七賢ノ一人ナリ。アルトキ嫂ノ帰ルヲ送リ
青眼ト下略

吉備左大臣ところ〳〵ゝ
ゝふ。墓好祠去せ〳〵ゝ
つゝみ。みつ作るりしみと
み百畝ゝるそ〳〵ふゝしいつり
ゝろ川の支みゝむさて東し
〳〵くゝべ〳〵。濁献ゞ云紫ゝ
ゝゝるゝといつり。

二月三日。此乃ゝとをあ
野云具を地ゝひゝをゝゞ
已と西〳〵くゝみを称う
有似乎君子失諸正鵠反求諸其身
ゝくゝをゝをゝ 清献云
公宇閲道。衢州人。奉進士。事仁宗英宗神宗。官至参政。又云清献
公座右銘云。行好事莫問前程 野趙云排擯趙抃氣貌清

逸人不見其喜慍。自号知非子。為待御史。弾劾不避貴勢。
師号為鉄面御史 皇朝類苑三十六云。馮瀛王詩。雖浅道而
多義理。皆勉人進。皆由命。何労發嘆声。但知行好事。莫問
前程。冬去氷将泮。春来草自生。請君観此理。天道甚分明
季吟云ゝゝをゝゝくゝゝゝゝ
程字向ゝゝゝゝゝゝゝゝ
つゝ是則次第生ほの詞
世をゝゝんゝをゝくゝや作
くゝゝゝゝゝゝゝゝ
ほゞ絶ゝゝゝゝゝゝ
高祖神武ゝゝゝゝゝゝ
ゞゞゝ。見れおやる人の愁
をたゞゝゝゝゝゝゝ
禹のゆゝて三箇を經せゝ。師を

三略上記

老子曰 世俗所謂道者 道之小者也 夫道者 所以治身 而及於家 治家 而及於國 治國 而及於天下 治天下 而及於萬物 萬物 道之末也 故曰 道之可道 非常道也 名之可名 非常名也 此之謂也 然則 治身 治家 治國 治天下 皆道之末也 故曰 道之小者也 夫道 野云論語遠人不服 則修文德 以來之 既來之 則安之 註 內治修 然後遠人服 有不服 則修德 以來之 安之 亦不當動兵於遠 而煩中國 動兵於遠 而煩中國 則中國之人 不得安其業 而遠人 不得安其所 故曰 修德 以來遠人 修德 以安中國之人 中國之人 安其業 而遠人

禹乃會群臣二旬苗民逆命益曰惟德動天無遠弗屆禹班師振旅帝乃誕敷文德舞于兩階七旬有苗格○蔡氏傳云○三苗國名在江南荊揚之間○恃險爲亂者也

わうさはせ血氣ありまり心あるようでて情欲ふた
望をあやまぬくらべけやそれより笑顔をこみそ
たりそよ風つまいさあるんうりまくおとしへんな
恥らしやこあのむ雲見ぐよさぐよんぐそよみうり情うり
めで約をいそぐくしまく百年の寿を深りの命を失つる
ありまり務ぐくまそ月のまくく久くんこう紙だ
めうぐだそそうかふんひさそてうぐさ世ぐうりよをうる者を
あやまりこよりて血氣よ海そて失あうりを
はばそのみき人きうんう血氣よ海そて失あうりを
いこいぬこう人ハんぐうたなれバあやまちてくる紀うり

ひとのこころ紀人のをしへをまもりうり 天地之利招うる
ものこと紀人ものこと心ばをはさくるまふとそ初そのれを驚くうけぐ
そくそくまのうえ文よこのんぐ文當言災うよありくまや
わうさはせ
情欲 說文情人之陰氣有欲者也ぐ人のあくろさ氣起
喜樂愛惡欲ホの事あうを情欲とそへ。喜の形ふへ情欲
とへ七情六欲ありとのつり。喜怒憂思悲恐驚の七情うり
眼耳鼻舌身意ハ六欲ありとのつり
ありまりそしむふ仰うり 物よさをうるなくまくい
ハうりうたとへうり 喜云前漢書云如坂上走丸
笑巖とこみそて 野云我國の法ふへ八門家をあつめ
て隣籬とも紀。残滓と鰺よ一庵の少き九紀鞍馬る
ふ金驚眉を買のおとく 拝てうり
うのうたいせ一日をそまくく拝てうり 苔のたりくふ

来る二月遊乃義ゟり
死ゟりまざる神之
白氏文集 第四 新楽府 并 感引 銀瓶之為二君一 一月愚作
百年身 いのち絃うるもの
もゝの世ゝ事 よゝそ
ねがひくなひて すゑも
ゟび死世ざゟり 行世
きぬる人ハ教神ゟゝ
ハ、ゟゝんをのづゝゝ
方とゑすけく慈ゟく
知ゝく智ゝ死ゟゝ
海ゟりまゝゟるがごと
ゟゝゟりを人の智恵
教神ところ

うゝゟり あゟく
氣血演暢ゟゝて物よ
うゝく ゟゝ
いひうゝゟり
こゝゟゝを法の字 まゟうゝ死ゟゝ教神
百ゟ乃字をゟやゟゟり
乃むゟふ 感動ゟゟる
ゝん字よ 感動ゟゟる
つゝく智ゝをゟふゆゝんゟり
小野小町が事ゟゟゟゝ
玉造ゝいゝよゝ
まで 大師の法施の
ゟりゝゟゝんゟゟり 小町が
ゟゝゟり

以治八年己未の人なるべし一生の始終
もれなくしるせるものなり

拾芥抄に出羽郡司女。仁明時承和之比
或に出羽郡司女。或に玉造小町。非此人事に
人一首抄に或説出羽郡司小野良實女。又常澄女
閑院御説當澄女とも

季吟云郡司とは國司よ守分掾目あるがごとくあるよ
も大領小領主帳主典とそあるがごとくあるよ

小野小町　古今集目録并
序歌無子孫。或。容貌
端正。身躰痩弱云々。行路之次。歩道之間。徑遍途傍有一女人
焦悴。吾是倡家之子。良室之女。爲性時
憐愴最甚。襄日愁歎猶深。又熟有思
情乎。野云。安倍清行之室。三善清行之室ぞ。

清行之室ぺき世よ。吾是倡家之女ぞ
ありぺきや。寛平延喜のころの人
ぞ。大師。附法傳并元亨釈書第一に詳也。又云々。
師也。大師の附法傳并元亨釈書第一に詳也。又云々。
よ沙門祝成が玉造の陰ありしものぞ。今
云言家へ參るとて此歌を詠ぜしとも
不可因縁よりて大師の御弟子となりぞ。
書云小野小町が哥ごとくなれ　　承和のそばめぶうくれ
季吟云小野小町が哥ごとくなれ　　承和のそばめぶうくれ
動るぞ。古今十二云々。按二云々。仁明天皇の時。寛平二年三
月廿一日ぞ。
ぞ云々。そもそも日本の俳諧の連歌の
云ぐさ　あべのさよ
ゆきもあたらぬ神はたらぬ人をぞ

めの名ぞなりそり　西一　こゝもと　とうかるう
るゝゝそ神よ聖そきん我いせきあつで巡つをるれぞ
同集十三慈三りひゝるの物名　秋の野ふさゝまけ一
物の神ゝりもあそめ・ゝそひちまりそろ・小聖
小町　乃ろあ乃紀ま方をうゝとろ・ひぞやうまうで
あまの竹一ゆくをふ　はこの世物ゝりよ物りひろ
乃うゝみ西一りり　みち古今集十八雑下　文座のやそひ
じぶ三の乃そうまなりてあぐゝんまいでゝゝドやと
いひりろかりことふうめろ　をよゝこゝち　まびぬ
まで引をそうゝさの神をるゝてさそよのあらをい
るんとそ物よ心ふ三の乃初宗小町う集も物る一　投撰
集十七雑ざ三のそ北ゝことゝするようで旨のそれな
くれを春あそてまりゝくゝんとゝくまりてでのる
ろ遍昭給ると人の法しぞそのひあそゝゝ

いひ給りろ　そよゝゝちまいて北うんて指まとそ
ぐいとそもし一めけの名いとゝみようろ　西一　遍昭
世とそひく宗の名そゝぐひとへうそそ一ぞあ
つまゝん心初古小町家集ろ一ぞひとへうそそ一ぞあ
てとあり大和物語ふ法ろ集うものことつもふうで
天皇うられ世給ひて出家ようとこまちを
ゝゝろう一ろうべい法行業事などこる仏ろ座の
ひ乃人ゝるふぐ題当うゝうんろの世一うるれべ
あまちがゝりハ大師入定ほるう事必せり。康秀そ
陽成院乃沖時の人とやあまろ大師うるをくなゝ
初ゝりひゝ奥別面そ一まふいうゝそのゝこまちゝ
髑髏乃私風のようくとのひ一とそさ
そろ多江記并も的名ふんてゝり。御ゝで小町ゞ
湯感つまハ葉事ゝりふ乃事ろや　若出る多安昭秘江記

なるべし。世遠ければ、その因縁よりて、大師の出生の小町と、別人の小町とを、混じ合せて、いろいろの説を生じたるなるべし。

大師の出生の小町が像絵巻あり。一大帖を接著ぎたるもの、未だ完からず。

小野小町は、仙女の如き美人なりしかば、大師の小町も、その如くなりしなるべし。

小野小町の像もしばしば描かれたるが、大抵は世の人々の嗜好に投ずるやうに、美しく描きたるものなり。

小野小町

ものどもの、さまざまの説ありといへども、未だ絶対の確説なし。

事蹟は、伝ふべきものなければ、伝へざるなるべし。

小野小町が、仙女の如き美人なりしことは、一定せるが如し。

小野小町の事蹟を、伝へざるは、平安朝の時代といへども、男子の事蹟を、伝へざるに同じ。

小野小町の像も、しばしば描かれたるが、大抵は世の人々の嗜好に投ずるやうに、美しく描きたるものなり。

小野小町

小野小町が、仙女の如き美人なりしことは、一定せるが如し。

小野小町の事蹟を、伝へざるは、平安朝の時代といへども、男子の事蹟を、伝へざるに同じ。

小野小町の像もしばしば描かれたるが、大抵は世の人々の嗜好に投ずるやうに、美しく描きたるものなり。

ととろくるとこの人　小兒ふぜいの
はなしなどを略話のちいさきを
氣味ともおもはず〳〵聞るべし　ぜんたい
人事物ごとの中よきとあしきとの
差別、善悪の大事なり。一〳〵よびろくあきらかに
人のつとめのまざらぬやうにすんぜんやう
のなき人といふことなし　あさき事ハおろそかに
もこゝろ人もたゞちよいと〳〵ぞんじ
ゆるし一生の間のふあんぜんぜんまでおよぼすものなれば
ことさら大のんきをしてやんや　雑を大ごとをあらわして
ゆへ　ぜんぜんよく入人をくるしめることなく
徒然草文段抄巻之一　五終